

日本経営学五十年

回顧と展望

山本安次郎 著

日本経営学五十年

—回顧と展望—

山本安次郎 著

東洋経済新報社

著者紹介

明治37年(1904) 島根県に生れる。
昭和5年 京都帝国大学経済学部卒業、
大学院に進み、経営学専攻。
昭和31年 経済学博士(京都大学第44号)
立命館大学教授、建国大学教授、滋賀大学教授、
京都大学教授、名古屋市立大学教授を経て、
現在 南山大学教授(昭和52年3月31日退任)。
専攻 経営学理論、経営学史、組織理論。
主要著書 『経営管理論』(有斐閣、昭和29年)、『経営学本質論』(森山書店、昭和36年)、『経営学理論』(ミネ
ルヴァ書房、昭和39年)、『経営学の基礎理論』(ミ
ネルヴァ書房、昭和42年)、『経営学研究方法論』
(丸善、昭和50年)、その他翻訳、編著多数あり。
現住所 〒227 横浜市緑区美しが丘3-22-13。

日本経営学五十年

昭和52年4月15日発行

著者 やまもとやすじろう 山本安次郎
発行者 宇梶洋司

発行所 東京都中央区日本橋本石町1の4 東洋経済新報社
郵便番号 103 電話03(270)4111(大代表) 振替口座東京3-6518

© 1977 〈検印省略〉 落丁・乱丁本はお取替いたします。 3034-5128-5214
Printed in Japan

序 文

昨昭和51年7月10日、日本経営学会は創立50周年記念日を迎えた。ここから数えれば日本経営学も齢50に達したことになる。此の日、私は本書の執筆を続けており、丁度わが国経営学発展の跡を回想する段階に達していただけに、私自身の歩みをも回顧しながら、深い感慨に打たれざるを得なかったのである。

実は、数年前から此の日のことが気になり、第47回大会（昭和48年、専修大学）総会においてこのことにつき会員諸兄の注意を喚起するとともに、ひそかに自ら経営学会50年の変遷や経営学50年の歩みについていろいろ調べ、カードを作り初めた。分らないことが多かったけれども、調べれば調べるだけ興味も湧いてくる。必要に迫られて書いた第一世代の先輩の業績についての資料も、相当の量になって来た。正史としての日本経営学50年史など書ける筈はないけれども、外史として資料集ぐらいは作っておきたいと思うようになった。自信ある訳ではないけれども、不備不完全でもないよりはまし位のものは可能かも知れないと思われる。時恰も南山大学は創立25周年を迎え、記念論文集が編集されることとなった。四学部のうちで最も若い経営学部の一員として祝意を表し、特に経営学部の発展を希念するとともに日本経営学会50周年を記念するため、かねて準備して来た日本経営学50年の回顧と展望を試みることにしたのであった。体系を考えながら、書き初めて見ると、問題が問題ゆえ意外に長文となり、昭和50年1月、6月、51年3月、6月、9月、12月と6回連載すること

になったのであった。折も折、南山大学叢書の発行の議が起り、その最初の1巻として本稿が取り上げられることになり、急遽訂正補筆して上梓したのが本書である。この機会の与えられたことに感謝したい。

本書は標題の通り日本経営学会50周年を記念して日本経営学の50年の発展過程を現在の「経営学説」の立場に立って回顧を試み、現状の理解を深め、将来を展望しようとしたものである。類書もないし、なるべく幅広く経営学の発展に関する事項を記録しておこうと考えたので、必ずしもすっきりしたものとはならなかった。しかしその叙述に当って著者が特に重点をおいたところが3点ある。第1は、日本経営学史を「経営学時代」の成立、発展として——いわば *paradigm revolution* の過程として——捉えようとしたことである。この見方は、当たり前といえば当たり前であるが、それだけに極めて重大である。われわれは日本経営学史を前史（第Ⅱ編）と本史（戦前史第Ⅲ編、戦後史第Ⅳ編）とに区別したが、その区別のメルクマールをなすのは「日本経営学会」の創立であり、それはまさに「経営学時代」の先取りであり、始まりを画するものであり、それ以後すなわち戦前史や戦後史は「経営学時代」の発展を示すものである。日本経営学会の創立に貢献した人びと、およびそれ以後の学会や経営学の発達に貢献した人びとが果して「経営学時代」を自覚していたかどうかは必ずしも明らかではない。しかしま顧みれば、意識すると否とにかかわらず、その努力自体が時代認識という歴史的意義をもつことは否定できない。50年史をこのような観点から解明したいと考えたのである。これは著者の創見であるといつてよからう。

第2は、日本経営学50年史を「経営学会史」「経営学部史」「経営学説史」という互に影響し合い、相互に規定し合う三層構造において叙述して、「経営学時代」をより具体的に示そうとしたことである。もちろん、戦前には経営学部や経営学科や経営学研究科といった制度は存在しなかったといつてよい。その意味において戦後史は戦前史に比して「経営学時代」を一層明確に示すものということが出来ると思う。この観点から初めて戦前史から戦後史への発展が歴史的に解明されると考えられる。すなわち戦前史から戦後史へは「経営学時

代」の発展なのである。それを示すものとして「経営学会史」も「経営学部史」も重要ではあるけれども、それらは外的制度的要件であって、その中核をなすものが「経営学説史」であることも否定できない。ここでは三層構造的叙述方法ないし考察方法について注意を喚起しておきたい。

第3は、そして最後は、日本経営学50年史を「経営学時代」にふさわしく、「経営学」説——「本格的な経営学」説——の実現過程と見、それがまたわが国経営学の世界史的使命に応える道であると見ていることである。経営学50年史は実は経営諸学説——管理学説、経済学説、個別資本学説、組織学説など——の対立抗争の歴史である。戦後においては経営学研究の多様化はますます甚だしく、その対象も方法も分化して行き「経営学」は解体の危機に直面し、諸学説間の対立もいよいよ尖鋭化して、「経営学」がどんな学問かは却って曖昧となり、問題さえ忘れられたかに思われるようになって来た。外国でもほぼ同様な傾向が見られ、心ある者をして「統一理論」を求めさせている。著者はいまこそ「経営学」50年の伝統を回顧し、その伝統に立って伝統を生かし、伝統を越え、「経営学」のパラダイムを確立すべきときであると考え、「経営学」は経営経済学（いわゆるドイツ経営学）や経営管理学（いわゆるアメリカ経営学）の略称や一方的選択としてではなく、むしろ両者をアウフヘーベンし、統一する「経営学」として確立されねばならない。それによって「経営学時代」を学理的にも立証せねばならない。それが日本経営学会50周年を記念し、経営学部の確立と充実を実現するに最もふさわしく、また急を要する事業である、と考えるのである。

以上が日本経営学50年史を通して試みた狙いであり、重点のおきどころである。それは史実の中から、資料検討の中から自然に成立した見方である。それは史実を貫く論理とでもいえるのか。著者はよく歴史的に論理的、論理的に歴史的というが、以上のことはまさに学史的であるとともに学理的、学理的であるとともに学史的であるということである。この点、特に読者の検討と批判をお願いしておきたい。

なお、本書の最も大きな欠陥は、日本経営学50年の基礎をなしている日本経

営史の分析が前提されるだけで、ほとんど全く行われていないことである。経営史と経営学史との対応的展開を基礎にして経営学理を考えようとする著者の立場からして、これは最も明白な欠陥である。これは著者の現在の能力からしても、また出版の時間的余裕からしても不可能であり、断念のほかはなかった。この点、読者にお詫びするとともに、これを補充しながら読み進み、理解を深めて頂きたいと思う。史実や史料や資料の限定もまた本書の欠陥というべきであろう。経営学年表にせよ、経営学会年表にせよ、相当に努力し、苦勞もした積りであるが、そこになお不備があり、不十分不満足な点のあることは著者が最もよく知るところである。誤謬や不備については教示願いたいと思う。より正確にして完備した50年史が出来ることを期待したい。本書がその捨て石の役割でも果すことが出来れば幸としなければならない。この程度のものであるが、本書が成るに当っては多くの人びとの協力を得た。一々断らないけれども、心からの感謝を捧げたい。

最後に一言しておきたい。本書の性質上巻頭に写真を掲げることにした。草創期の人びととして5人の先駆者や建設者の写真を掲げることにした。若い人びとには別に何の感興も湧かないかも知れない。しかし第二世代、第三世代の人びとには忘れ得ない名前であろう。これを目のあたりにしながら本文を読めば、味わいもまた異なるものがあるのではあるまいか。これら貴重な写真を集めるに当って協力頂いた人びとのお名前を併記して感謝の意を表したい。上田貞次郎博士（猪谷善一博士）、増地庸治郎博士（増地昭男氏）、平井泰太郎博士（平井愛子様）、中西寅雄博士（高田 馨博士）、馬場敦治博士（著者）である。第1回大会と第50回大会とを対照させたかったが、周知の通り第50回大会は参加者が余りに多すぎて記念写真も断念せざるを得ない盛況であったので、その代りに、栗田真造博士の好意により、記念講演の写真を掲げることにした。

いま校正を終り、つくづくと歴史の難しさをかこち、序文を書きながら思うのである。余りにも自分の歩みに拘泥しすぎ、自分の見解に囚われすぎ、勝手なことを言いすぎた嫌いが無いではないか、と。些か面映ゆい気もしないではない。しかし本書が回顧を要求する限り、それも止むを得ないといわねばなら

ない。ともかく拙いながら、多少とも思い出を記す機会が与えられたことを喜びとしたい。

なお、本書の出版に当り、東洋経済新報社出版局の皆様特に能勢大士氏には始終大変お世話になった。心から感謝申し上げる。

昭和52年2月15日

横浜美しが丘の寓居にて

山 本 安 次 郎

目 次

序 文

第Ⅰ編 日本経営学史序説

第 1 章 日本経営学史の課題 5

1. 日本経営学会の50年 5
2. 時 代 の 区 分 9
3. 問題の提起と限定 11

第Ⅱ編 日本経営学前史

第 2 章 日本経営学成立の背景とその胎動 17

1. 日本経営学の起源 17
2. 高等商業教育制度の発展 20
3. 上田貞次郎博士とわが国の経営学 24

第 3 章 日本経営学会の創立 29

1. 学会創立の発起 29
2. 創立の会議 32
3. 創立の意義 35

第Ⅲ編 日本経営学戦前史

第 4 章 日本経営学界と学会史 41

1. 戦前史概観 41
2. 「経営学」という名称をめぐる 49
3. 日本経営学会史——大会統一論題の推移 53

第 5 章 わが国経営学説の台頭 61

1. 学界の動向特に諸学説の興隆 61
2. 増地経営経済学説と平井経営学説 62
3. 馬場経営学説 66
4. 中西経営経済学説——否定説 71
5. 経営学研究の展開と戦時経済 74

第Ⅳ編 日本経営学戦後史

第 6 章 日本経営学戦後史概観 79

1. 戦前史から戦後史へ 79
2. 経営学発展条件の成熟 84

3. 問題の提起と限定——学部史，学会史，学説史·····	87
-------------------------------	----

第7章 経営学部の成立と発展 89

1. 平井博士と神戸大学経営学部の創設·····	89
2. 経営学科と経営学部の発展·····	99
3. 大学院経営学研究科の発展·····	104

第8章 戦後日本経営学会史——統一論題史 111

1. 戦後学会史序説·····	111
2. 転換期の大会統一論題·····	114
3. 復興期の大会統一論題·····	121
4. 発展期の大会統一論題·····	127
5. 学会史を顧みて·····	135

第9章 戦後日本経営学研究の発展概観 141

1. 経営学戦後史の中心問題——学部史， 学会史から学説史へ·····	141
2. 学説史の課題——経営学のパラダイム·····	144
3. 戦後経営学研究の発展と経営学の危機·····	148

第10章 戦後経営諸学説の展開 161

1. 戦後経営諸学説の体系的考察·····	161
2. 管理学説の台頭·····	164
3. 経済学説の展開·····	166
4. 個別資本学説の興隆·····	168

x 目 次

- 5. 組織学説……………171
- 6. 諸学説の比較的小よび批判的研究と経営学説……………173

第11章 戦後経営諸学説の比較と批判 177

- 1. 学説史の課題と日本経営学の世界史的使命……………177
- 2. 経済学説と管理学説——比較と批判……………181
- 3. 経済学説・管理学説と組織学説——比較と批判……………188

第12章 「経営学説」の必然性 195

- 1. 学史の動向——名実共に「本格的な経営学」……………195
- 2. 学理と現実の要求——経営学の基礎「経営の発見」……………197
- 3. 立場の転換——paradigm revolution……………199

第V編 回顧と展望

第13章 経営学と私 205

- 1. 経営学に志して……………205
- 2. 経営学研究の跡を顧みて……………209
- 3. 経営学の課題と将来の展望……………213

日本経営学史年表 215

日本経営学五十年

——回顧と展望——

第 I 編 日本経営学史序説

第 1 章

日本経営学史の課題

1. 日本経営学会の50年

日本経営学会の創立は大正15年（1926）7月10日であるから、¹⁾ 後1年（昭和50年から見て）で50年の記念日を迎えることになる。²⁾ 改めていうまでもなく、日本経営学会の創立は、新しい「経営教育の時代」「経営学の時代」の到来を告げるもので、これまで細々と続けられて来たわが国の経営学研究の発展にとって土台がおかれ、舞台の出来たことを意味し、やがては堂々たる本建築への期待、新しいシテやワキの登場を待望するもので、わが国の経営学史上ま

1) この創立の経過については、日本経営学会編集『経営学論集』第1輯，同文館，昭和2年3月，251ページ以下に詳しい。池内信行「日本経営学会の創立」関西学院『商学評論』第5巻第2号（大正15年9月）；平井泰太郎「日本経営学会の成立」『国民経済雑誌』第41巻第2号，また平井泰太郎編『経営学辞典』ダイヤモンド社，昭和27年，53ページ；村本福松「正しい経営学」『新銀行実務』169号，なども参考となる。後で詳説する。

2) 著者は第47回大会（昭和48年専修大学）の総会で50周年が近づいたことについて注意を喚起し，何か記念の行事をやるかどうかきめるべく提案した。49年に入り幸いこの提案が理事会で可決され，第48回大会でその点が報告された。新理事会に引き継がれ，記念行事の小委員会も出来た。この委員会によって第50回大会の記念行事として「日本経営学会50周年記念講演会」（講演者，山本安次郎「経営学50年の伝統に立って」，藻利重隆「日本的経営と日本経営学」，古林喜楽「日本経営学の将来と課題」）が催され，「日本経営学会50年の歩み」が編集された。